

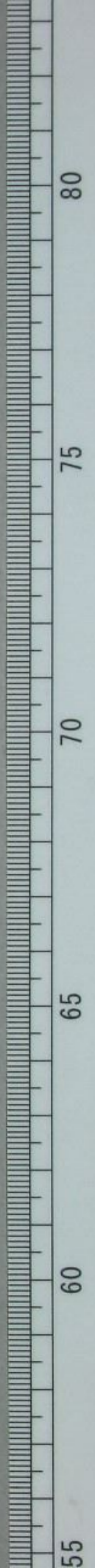
上

京之水

鹿^米之卷

共
二
冊

リ 4
4871
1



門リ
4871
1

京の多 麁之卷

洛下 秋里 舜福湘夕編

平安城興基

冬々夏夏果の時ハ知ら人皇此肇 神武天皇天下小玉た侍小
 建公の神代此蹟を銚日向國宮修まふ都一多ふ。此時天下
 草味りて封域い備と定ら度。東征の後初て都を大和國橿原宮と
 定ちし由也。爾後四門を闢た八方を朝せむ。畿内山代國乃造り
 阿多根令に居給ひ多。諸社根元記白山城國ハ日本の正中あり
 高天原を隱し多。又天文の度板を考ふる。當國ハ
 北極を考る。三十五度半強あり。陸奥國津輕に於てハ北極を考る。四十一度ハ
 九州肥後にてハ三十一度ハ



門リ
259
1

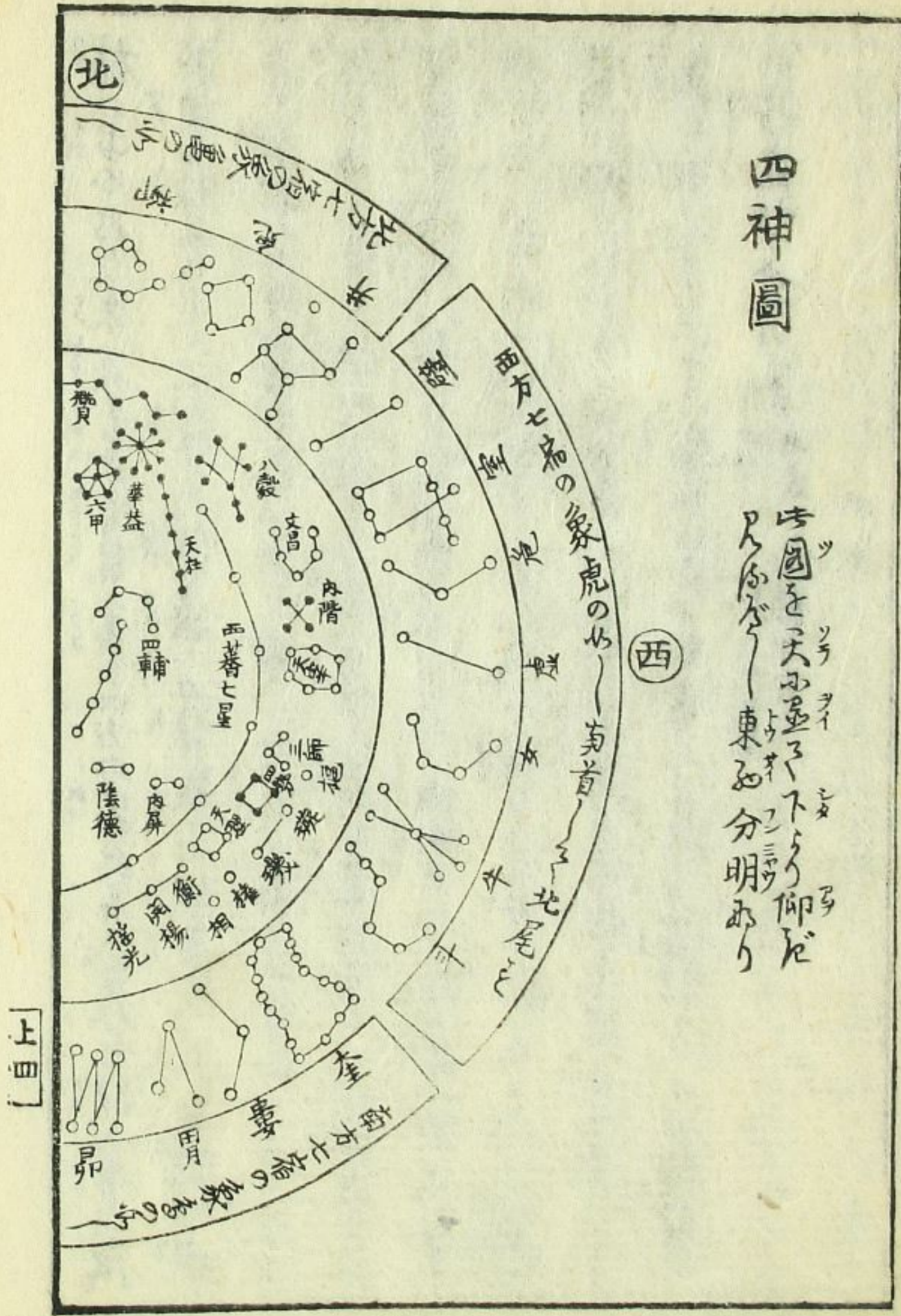
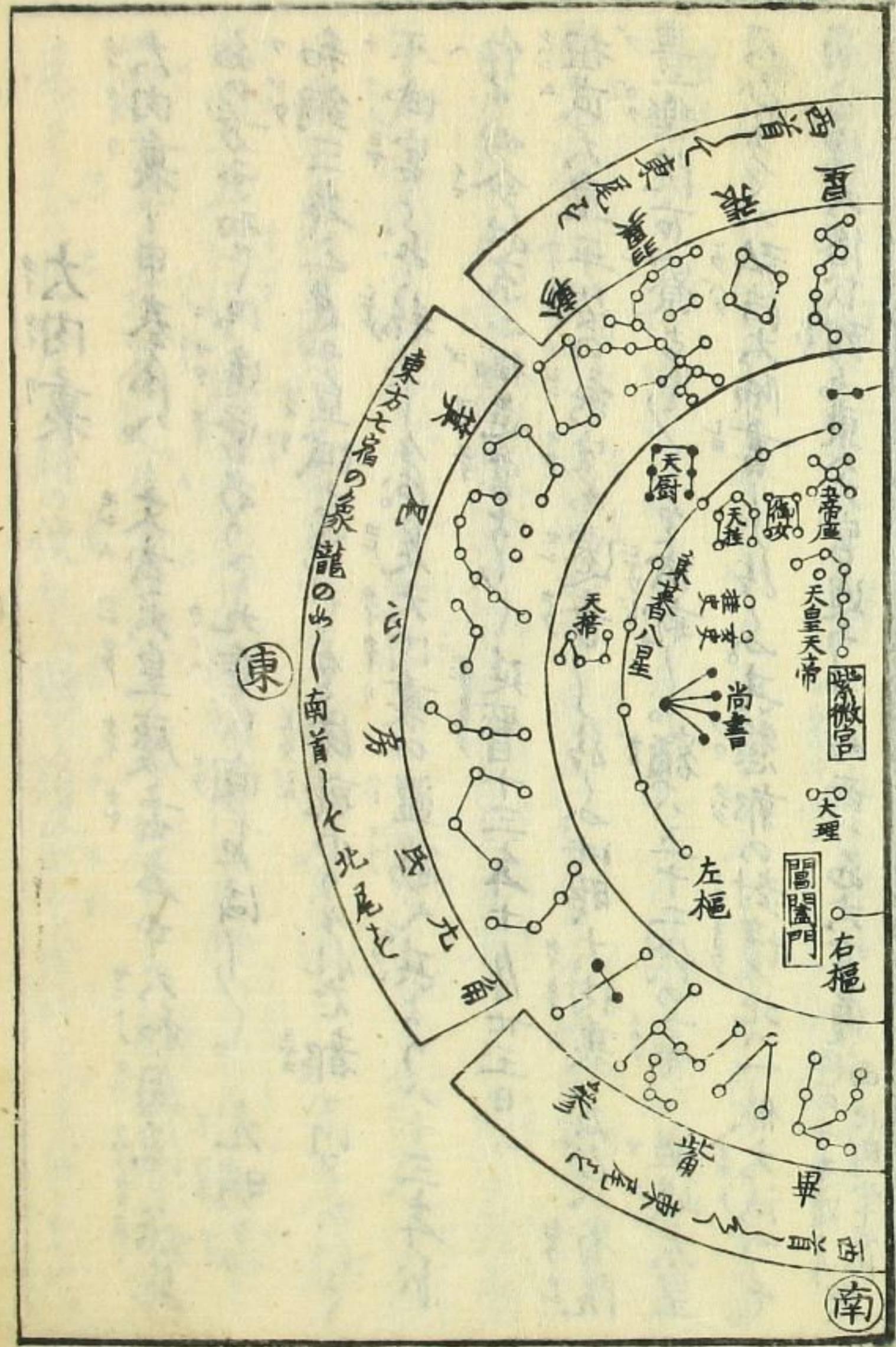
桑議治部卿壹志王加賀茂大神遺^{ツカハ}遷都^{セント}の^{ツカ}後^{ツタ}は
 同^ドト^ク己^ミ卯^ト日 天皇^{カト}葛野^ノ郡^ノ宇^ウ多^タ邑^ヒ小^コの^コあり^キて^シ新^ニ京^{キヤウ}の^シ
 地理^{チリ}を^{ユイ}敷^シ覽^{ラン}一^ニ移^ヒす。五位^{イノ}以上^ノ及^ヒ諸^{シヨ}司^シ主^シ典^{テン}叙^シ一^ニ之^ノ役^{エキ}ま^カを^ス進^{シン}免^{メン}。
 新^ニ都^トの^{キヤウ}宮^{ミヤ}屋^ヤを^サ造^{ソウ}立^リ一^ニ九^ク重^{ジュウ}に^シす^キ。日^ヒ方^{ホウ}の^ヤ洛^{ラク}域^{イキ}に^ホ墮^ダを^ホ掘^コり^テ廢^ヘ設^{セツ}
 典^{テン}一^ニ絶^{ツク}之^ノ城^{シヤウ}造^{ソウ}一^ニの^{コト}同^ド十^{ジュウ}三^{サン}年^{ネン}十^{ジュウ}月^{ゲツ}詔^{ミコトノリ}あり^テ是^レ國^{クニ}は
 山^{ヤマ}河^{カハ}襟^{キン}帶^{タイ}一^ニ自^ヨ然^{ゼン}と^シ城^{シヤウ}を^ホ移^ヒす。故^{コト}に^シ山^{ヤマ}背^セの^メ又^{マタ}改^カめ^ラれ^ル。都^{ミヤコ}は^ヘ平^{ヘイ}安^{アン}城^{シヤウ}と
 號^ナす。今^{イマ}の^{コト}御^{ミコト}代^ト至^シる^ニ一^ニ千^{セン}有^ユ載^{サイ}を^ヘ登^トる^ニ遷^セ都^トあり^テ中^{チュウ}華^カを
 有^アり^テ今^{イマ}の^{コト}御^{ミコト}代^ト至^シる^ニ一^ニ千^{セン}有^ユ載^{サイ}を^ヘ登^トる^ニ遷^セ都^トあり^テ中^{チュウ}華^カを
 有^アり^テ今^{イマ}の^{コト}御^{ミコト}代^ト至^シる^ニ一^ニ千^{セン}有^ユ載^{サイ}を^ヘ登^トる^ニ遷^セ都^トあり^テ中^{チュウ}華^カを

上二

いま^{イマ}其^{ソノ}例^{レイ}如^ニし。諒^ニ天^{テン}津^ツ日^ヒ嗣^スの^{クニ}位^イ一^ニた^カひ^カ一^ニら^ウ五^イ十^ス鈴^{スズ}川^{カハ}は
 か^カう^ウれ^レ之^ノ世^セに^ス任^ニの^ハは^ハれ^ルの^ノ業^ノを^カ敷^キく^ニ一^ニ皇^{クワン}邑^{イキ}の^ニ長^{チヤウ}あ^リら^ハば
 延^{エン}曆^{リキ}の^ニ帝^{テイ}結^{ケツ}繩^{ジュウ}此^{コノ}政^{セイ}を^カ一^ニ母^{ハハ}天^{テン}下^カに^カ化^カ成^{セイ}一^ニ加^カ之^ノ代^{ダイ}々^々の^ニ聖^{セイ}至^シ
 德^{トク}を^フ踏^{フミ}仁^ニを^フ詠^{エイ}ト^シ上^ウ古^コと^シ風^{フウ}を^フ同^{ドウ}じ^ニ一^ニ母^{ハハ}群^{グン}生^{セイ}を^カ養^{ヤウ}育^{イク}一^ニ之^ノ也^{ナリ}。
 四^ヨツの^ニ海^{カイ}清^{セイ}平^{ヘイ}一^ニ母^{ハハ}億^{イキ}兆^{テウ}の^ニ年^{ネン}公^{コウ}彌^{メイ}ん^ンと^シあ^リら^ハれ^ル也^{ナリ}。
 四^シ神^{シン}相^{シャウ}應^{エイ}地^ヂ之^ノ解^{カイ}
 蒼^{ソウ}龍^{リウ}朱^{シュ}雀^{ソク}白^{ハク}虎^コ玄^{ゲン}武^ブは^ハに^シ神^{シン}相^{シャウ}應^{エイ}と^シ一^ニ四方^{シヤウ}に^シあ^リて^シ是^レの^ノ
 鬼^キ神^{シン}の^ノ象^{シヤウ}一^ニ母^{ハハ}六^{リク}八^{ハツ}の^ノ本^{ホン}天^{テン}の^ニ二^ニ十^{ジュウ}八^{ハツ}宿^{シュク}を^カ四^シ割^{カク}し^テ七^{シチ}宿^{シュク}に^シ
 日^ヒ方^{ホウ}に^シ配^{ハイ}一^ニ母^{ハハ}其^{ソノ}星^{セイ}象^{シヤウ}を^カ一^ニ母^{ハハ}星^{セイ}の^ノ右^ウ所^{シヨ}を^カ時^{トキ}に^シあ^リて^シ東^{トウ}を^カ一^ニ母^{ハハ}角^{カク}亢^{コウ}氏^シ房^{ホウ}に^シ尾^ビ箕^キの^ノ七^{シチ}宿^{シュク}に^シ
 一^ニ母^{ハハ}其^{ソノ}星^{セイ}象^{シヤウ}を^カ一^ニ母^{ハハ}星^{セイ}の^ノ右^ウ所^{シヨ}を^カ時^{トキ}に^シあ^リて^シ東^{トウ}を^カ一^ニ母^{ハハ}角^{カク}亢^{コウ}氏^シ房^{ホウ}に^シ尾^ビ箕^キの^ノ七^{シチ}宿^{シュク}に^シ

龍の如く。斗牛女虚危室壁北七宿の如く。虎の如く。奎婁胃昂畢此角參の七宿の如く。短尾の鳥の如く。これを南方と云。井鬼柳星張羽異軫の如く。蛇の龜伏絡の如く。これを北方と云。是星象が四方の色に配る。東ハ木也青一西ハ金にて白一青龍白虎朱雀玄武と云。南ハ火也赤一北ハ水にて玄一青龍白虎朱雀玄武と云。已上東涯南ハ火也赤一北ハ水にて玄一青龍白虎朱雀玄武と云。制度通取意。雨雅の釋天疏も四方の色と云。此宿あり。各一つの形は。東方龍北形の如く。西方虎の形は。又南方首の如く。北方尾の如く。南方尾の如く。北方首の如く。皆宿に首の如く。東は尾の如く。又禮記も四神の旗の形あり。行々朱雀玄武と云。去武以後。青龍は左の如く。白虎は右の如く。招搖は上の如く。云々。これを陳階註の行々軍

旗の出如く。朱雀玄武青龍白虎四方の宿は名へ。これを旗の重之。其旗の紋み。龍の旗ハ五旗。雀ハ七旗。虎ハ六旗。龜蛇ハ四旗あり。招搖ハ北斗七星の如く。天子ハ昴天の令を以て政を施す。旗の如く。旗ハ紋を畫す。北方の星は象の如く。又四神の中ハ紫微宮閭闔門あり。内裏は淮南子も閭闔ハ本天の紫微宮の門の如く。これを借る。天子の門の如く。楚詞ハ天門の閭闔ハ禁門の稱と云。北辰其所居。衆星之拱也。皇居の如く。天の象に准る。二十八宿は四方に配當と云。此の謂く。四神相應の地は。拾遺記も大槩出せり。



四神圖

此圖を二大星を以て下より仰ぐ
 凡ゆるが東を分明あり

上四

大内裏

大内裏と申奉るは。文武天皇慶云年中大和國添上郡此
西の方小初子造宮あり九重に闢を造りし。元明帝
和銅三年二月小皇城を造りて成就有りし都に比し
平城宮を稱し是後是大内裏の濫觴也其より八十二年
行す今此京小御造宮あり延暦十三年十月廿三日
桓武天皇平安の執宮を遷す。是時大内裏及び八省院
豊樂院百寮を造りて成就有。額八十二代之帝嵯峨天皇
及び多く弘法大師書し終ふ其惣郭の封境北一條大路ありて
南二條大路あり。東六宮通あり西八宮通あり

南北十町小経り東西八町小経る。大内山。大宮。百舌。玉女庭。紫庭。

新帝 白雲の丸を造りて山岑ありて大内山といふありては

續古 九を北大内山のいふなりんかたりと云ふは

朱雀門 七間五戸 皇城南面中央の正門に南の廣路に朱雀通あり

南方洛中の封境に羅城門あり。名義は天官の朱雀ありて象に象鳳

と。北南方の七篇を十二次に配するを鷄火不當と云ふは

曰長安南面皇城門を朱雀門といふ。伴氏これを造ると云

大同二年弘法大師書ゆ。奉朝神仙傳曰大師入定の後小舟道

此額を足す朱雀門に朱の字ありてはと疑はる。忽其衣の裏に化人

來つて是は弘法大師の使あり。能く額の文字に疑はるるを

道風の首はさつてつら踏多。道風驚く仰をたるふ。た如履の鼻書お
入る其人見へどみんひひ傳へる

美福門五間 皇城南面之門の中より、朱雀門の東あり。壬生氏
ちん派造る。洛陽壬生通むるは、壬生御門ともいふ

皇嘉門五間 皇城南面之門の中より、朱雀門の西あり。若大耳氏
これを造る。長安の壬生通ふ當り、拾芥抄に雅樂寮御門と云ふも、
二條大洛以緯ふ。まのの額ハ弘法大師の筆蹟と著聞集あり。二

陽明門五間 皇城東面之門の中より、近衛通今の出今當り、近衛御
門とも称ど。山氏を造る

待賢門五間 皇城東面之門の中より、中御門今大洛木町今の榎今の中御門

とも称ど。建部氏を造る

郁芳門五間 皇城東面之門の中より、大炊御門通今の竹今のゆ今を
大炊御門とも称ど。的氏を造る。まのの額ハ、嵯峨天皇の宸筆

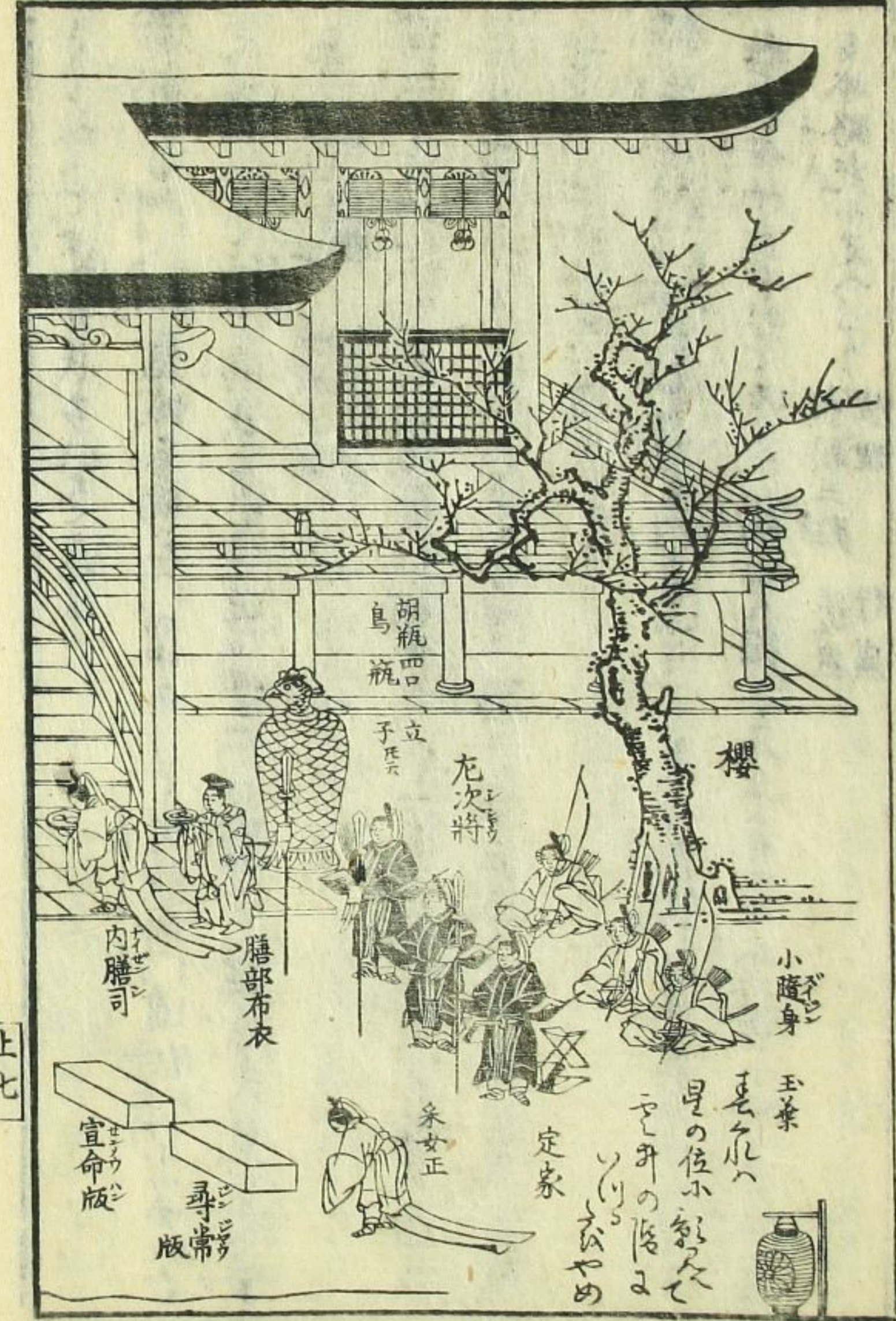
り。日本三筆、嵯峨天皇、橘逸勢、弘法大師

談天門五間 皇城西面之門の中より、一名馬寮御門とも稱ど。内ハ
左右馬寮あり。壬生氏を造る。額ハ初弘法大師。後ハ小野美材

書と旧記あり

藻壁門五間 皇城西面之門の中より、長安中御門の中より、西中御門と
称す。佐伯氏を造る。額ハ天徳三年五月七日、木下頭小野道風書

日本略紀あり、本朝三跡、道風、佐理、行成



⑤ 殷富門 五間 皇城西面三門の中より長安近衛より西近衛
御門と移次。伴橋部氏より造る。額小野美材書次

⑥ 偉堅門 五間 皇城北面三門の中より中央へ猪養氏より造る。若
小一條大洛を緯く南へ朱雀額へ橋逸勢書と。舊へ玄武門といふ。
花山院の寺佛道より入りし御落飾の時。密小門より出御し
たす。安倍晴明天文に觀りしに養一と云ふ。爾後此門をかくら
はる。俗に不明門といふ

⑦ 達智門 五間 皇城北面三門の中より東の方へ丹后比氏より造る。
額八間と云へた逸勢書次

⑧ 安嘉嘉門 五間 皇城北面三門の中より東の方へ海大養氏より造る。

一名兵庫寮御門と移次。右の方へ兵庫寮あり。同と云へた逸勢書次

○ 四方合てしを皇城の十二門といふ。都賦に曰披三條之廣路立十二之通

門云所傳三條ハ一方ハ三條の。書上東門ハ東面陽明門の北より土御門

大路ありと云ふ。上東門ハ左傳定公八年の篇に出入る。杜註に曰魚首の東城の北門あり。又

と移次。文選冠籍十七首の詩に曰歩出上東門北望首陽岑。註に曰洛陽

の東門。書上西門ハ殷富門の北よりあり。土御門と移次

皇城の中央ハ北關。禁裏より又鳳關。前ハ大政官。八省院豊樂院

院雅樂寮侍從所。主計寮。民部省。式部省。主稅寮。中務省。陰陽

寮。宮内省。大炊寮。醫院。大膳職。前坊。左兵衛府。左近衛府。外記。結政

酒殿。弓場職。曹子。梨本。内教坊。主殿寮。縫殿寮。内藏寮あり

○修明門 皇居南面建礼門の西なり。右馬陣と云ふ。又右廂僻仗門と云ふ

○朝平門 皇居北面小なり。縫殿陣と云ふ。又宮北面僻仗中門と云ふ

支華秀麗曰 奉拜掖庭蘭橋尚書

朝平門衛不敢入別有殊恩拜掖庭
美女花簪傳芳命一言猶是粉骨情

野岑守

○式乾門 皇居北面朝平門の西なり。一名西廂僻仗門と云ふ

○建春門 皇居東面なり。左衛門陣と云ふ。一名宮東僻仗門又外記

新撰朗詠曰 元日の宴公賜ふく

不醉争辞温樹下建春門外雪埋春

善相公

○宜門 皇居西面なり。右衛門陣と云ふ。一名西面中門と云ふ

宮城内門 皇居二重目の門あり

○義明門 五間紫宸殿の前庭なり。南面内門と云ふ。建禮門の内あり。扶桑略記

小曰應和元年小野道風殿上小於承明門の額を書き云 江家次第小曰

節會兩儀於義明門壇上奏樂。同曰元日節會義明門内東西掖東

西行各立七丈帷二字下畧

○長樂門 義明門の東あり。左廂門と云ふ。江家次第曰元日節會長樂門

南面東掖第一間東柱下設外辨親王公御座

○永安門 義明門の西なり。右廂門と云ふ。江家次第曰佛名列立永安門壇下

○玄暉門 朝平門の内なり。宮北面僻仗内門と云ふ

○安嘉門 玄暉門の東あり。拾芥抄曰安嘉門と書ハ 東廂門と云ふ
傳寫の謬也

晉 徽安門 玄暉門の西あり。西廂門と云ふ

魯 宣陽門 建春門の内あり。東面中央へ。これを左兵衛陣と云ふ

魯 延政門 宣陽門の南あり。右廂門と云ふ

魯 嘉陽門 宣陽門の北あり。左廂門と云ふ

魯 陰明門 宣秋門の内あり。西面中央へ。右兵衛陣と云ふ。又西面内門も移成

魯 武德門 陰明門の南あり。左廂門と云ふ

魯 遊義門 陰明門の北あり。右廂門と云ふ

殿舎 並皇居内門

○紫宸殿 南面あり。承明門の内あり。拾芥抄曰俗に南殿と云ふ。九間四面

天曆御記曰遷都より已前に皇居の地を秦川腸が佳くはる。紫宸殿の正

紫宸殿ハ宣政殿の北あり。唐書に凡そ
四面壁代帷養之 其外同書の所々ハ
出たり粗を略ス 禁掖秘録曰紫宸殿 母屋の中

央ハ多帳を以て中ハ法いし。おき。獅子を備。犬法。帷の内あり。り。そ

出所あり。の外ハ額。万んを。あり。そ。か。ハ。初。主。の時。を。格子。に。下。は。え。

素のとみ。此。万。ハ。書。あり。も。あり。そ。ハ。通。際。子。に。公。子。の。賢。聖。の。侍。子。に。公。子。に。此

外ハた。て。た。き。き。し。は。ま。は。は。ハ。格子。も。あり。侍。子。も。あり。そ。り。云。賢。聖。障。子

ハ南殿の内。た。ま。ら。ん。と。り。八。間。中。華。賢。聖。の。画。像。東。に。間。あり。そ。一。間。馬。周。房。玄。徽

二。間。諸。葛。亮。上。處。伯。王。三。間。子。管。仲。子。產。劉。錫。何。四。間。伊。尹。仲。山。南。西。に。間。あり。そ。母

一。間。杜。預。張。華。二。間。陳。寔。班。固。三。間。桓。榮。仲。山。南。西。に。間。あり。そ。母

○左近櫻。空。屋。の。傍。階。の。と。も。あり。南。殿。様。と。も。法。隆。様。と。も。ハ。麻。呂。代。編

年集成曰南庭後松ハ舊梅也。桓武天皇遷都の時時々植りあり。禁秘抄曰貞觀の頃ハ樹枯根を掘り絶不萌出を坂上龍守勅さうけり云ん枝葉再び生ずるなり

續千載 南庭の松を本府より極作の時大内の花はたささけり云ん

○右近橋 同ト記階下あり。法隆寺より編年集成曰此樹を原橋大夫と稱す云々の後園此木之枝葉行たぬど一々天徳の末子

及ふありと云。又小一條左大臣記曰橋本之八秦保國ありと云

○日華門 南庭の南大を東向門と云。春興、宣陽、兩殿の

使經宣陽殿壇著版祿所設日華門内南腋云 陣座の式御宮記

○月華門 門所西の方あり。安福校書江次弟白年号改元日大臣奏陣定申

○仁壽殿 九間 東殿の北あり 仁壽殿東庭相撲召合式

○兼香殿 九間 仁壽殿の北あり 延喜十八年兼香殿の事存凡の事

○常寧殿 九間 兼香殿の北あり 延長六年十月女房常寧殿の事存凡の事

○貞觀殿 常寧殿の北あり 延長六年十月女房常寧殿の事存凡の事

○春興殿九間日華門の南にあり。江次第曰元日節會兩儀大夫若侍從列兼明門東西廊内第三間立標侍從座設春興安福兩殿庇云同書曰七日節會若雨戈東從春興殿西庇北行云禁脔秘鈔曰馬歩後のとれわく歩馬ははやくいふ事無殿の乾れははやくとたう云

○宜陽殿九間日華門の北にあり。江次第曰元日節會左近陣座南庭中央東西行曳班幔二條云

枕草子
きさうてん乃一のふかひいふ事をさへれ中ねそをさきひ

○綾綺殿九間巨陽殿の北にあり
貞觀の時時綾綺殿のまか梅の木ありをみのかてふ
まろく枝のこみちいふたたりをとり畧

古今
おあーえむつれて木のまはれうろふおこをむねのうらふとく
後集

○温明殿七間後後殿の東にあり。内侍所拾芥鈔曰云温明殿の海抄曰
多の山家神天皇内侍所同殿を垂れ給ひ温明殿は七間ま遠り
出まひへ。又白河院御記内侍所北神鏡飛出天か上人の
女官衣の袖は魚のめりまをたひひにら女官古護云とらふ
保氏紅葉賀
ゆめさうしをかうさうさうまをみ満まれば
温明殿のつらひたさありたし入んまの
内侍琵琶ひひあうらうりたる

○麗景殿七間後後殿の北にあり
れいけい殿のつらひたさありたし入んまの
家集
さかかへせぬおれ給ふらふまをたひひにら女官古護云とらふ
伊勢

○宣耀殿七間麗景殿の北にあり
せんぎょう殿のつらひたさありたし入んまの
つらひたさありたし入んまのつらひたさありたし入んまの
伊勢

已上六殿起^テ干東南行北東皆子午建之^方

○安福殿^{七間} 二面^自 自^其 南^{あり} あり。藥殿^{江次第曰在安福殿之内侍殿}

同書曰 元日節會立胡瓶二口安福殿東庇^{同書曰} 重陽宴文臺立安福殿

東壇上

○校書殿^{七間} 二面^自 自^其 北^{あり} あり。弓場^ノ 蔵人所。下侍。校書所。孔雀

間。右近陣みかき殿の内あり

拾遺 延喜の時時八月十五夜、僧人所のまのまの月夜あり作ら

○清涼殿^{拾苾鉢曰云中殿又云御殿七間四面} 紫清兩殿圖別勘曰七間四面ハ

御手水間。御湯殿。禁腋秘鉢曰清涼殿を常かりてせ給ふ殿あり中殿

無乏時七間四面也 禁腋秘鉢曰清涼殿を常かりてせ給ふ殿あり中殿

ういさう。はぬく四帖五ふは帖之。之方の中は阿まき後並は四のすは
たれ。四尺几丁之本三方の中はあり。下はま川。後ハ二尺の几丁
は帳の帷をたき。ういさう。几丁は帳のういさう。此方かす。えそ
多の。内にうきんの。侍座。二帖を。一を。侍帳の前乃志を。不左。右。獅子
狛犬あり。中畧。二之間。小。五。物の。机。北の。机。樂器。は。ま。う。へ。子
琵琶^{書上} 其。より。水。の方。小。笛。の。こ。次。房。に。和。琴。は。ま。した。其。前
侍帳の。南。乃。字。に。大。床。子。二。御。は。ま。川。か。う。ら。ふ。の。帖。こ。中。か。さ。ひ。す
園。庭。一。枚。を。ま。を。御。座。と。は。南。の。う。い。さ。う。日。記。の。後。厨。子^{あり}
子。小。侍。厨。子。二。御。を。ま。川。南。の。う。い。さ。う。日。記。の。後。厨。子^{あり}
二。御。を。ま。川。南。の。う。い。さ。う。日。記。の。後。厨。子^{あり}

より其の中ふよの人の園をわたり云

延喜音

長涼殿を

和漢朗詠

西樓月影花間曲中殿燈殘竹裏音 文時

長涼殿ハ常此宸居之書御座夜御殿朝餉間なり二間とてふは

御講の時佛像を置せし所之鬼間とてふは白澤王の鬼を斬る

画あり其の戸菊の戸もちかありし也黒戸ハ長涼より北へり廊あり

其の長涼子昆明池長子布子字位の綰代其墨画あり

長涼殿の弘廂あり上御壺禰臺盤所殿上間渡殿御裝物所

灰壇下侍長橋ハ長涼より案宸殿へ通る廊あり吳竹臺は

吳竹漢竹臺を漢竹に植ふる也東の在に御溝水の出所なり

籠口ハ長涼の名これより出御溝水ハ大内の名あり

盃とて之曲水の御宴あり

新續古今

著聞集曰秋の戸此なる布子ハ其の長子ハ長足

長女と書ふる其ハハ字位の内ハ長子ハ清納言

長子の孫も及人あり一糸院以住み

延喜音

禁祕御鉞曰石灰壇四季御屏風三尺南第一間

禁祕御鉞曰石灰壇此御屏風内右陪膳圓座又燈樓

あり一の所北中のほははあり物とて加ふる

ともつふいへハ火おろし料理をせしむ

同録曰^{ヨレ}夜のおとハ床帳日の御座の如く又古縁をきり四のすふ焼

ろわりかいも一のふふきく尺入あり床帳のふつ二あとの方ふり

みりたり登の御座も同一床いふきふふふらふふふふの下

古縁はさんとい尺三尺斗ぬくはうあり古縁の傳ふあり

長曆御記ふ尺入り中畧夜のおとハふふのおとつふはたふふ

むつふ左右きふの弓場はゆんといぬ

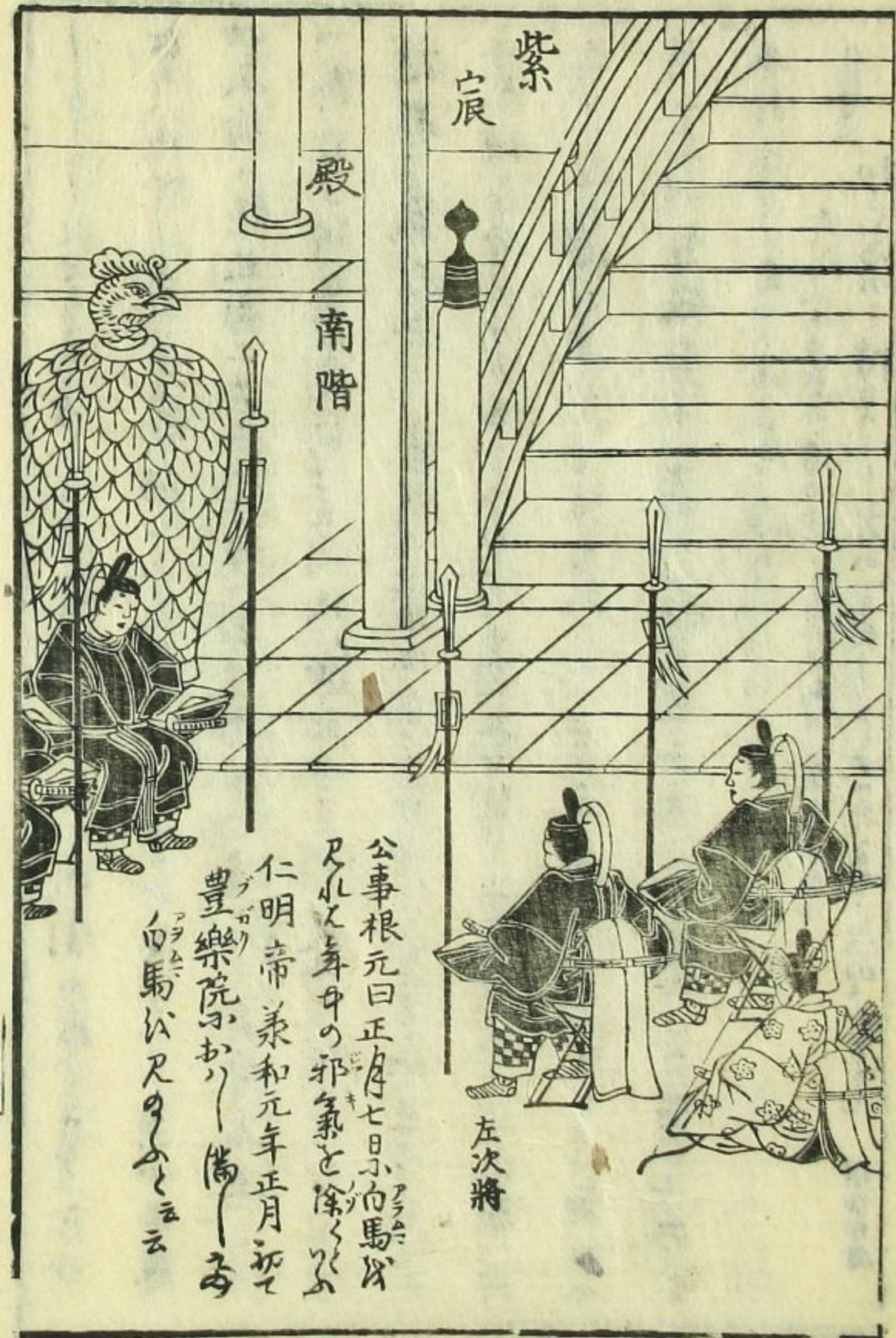
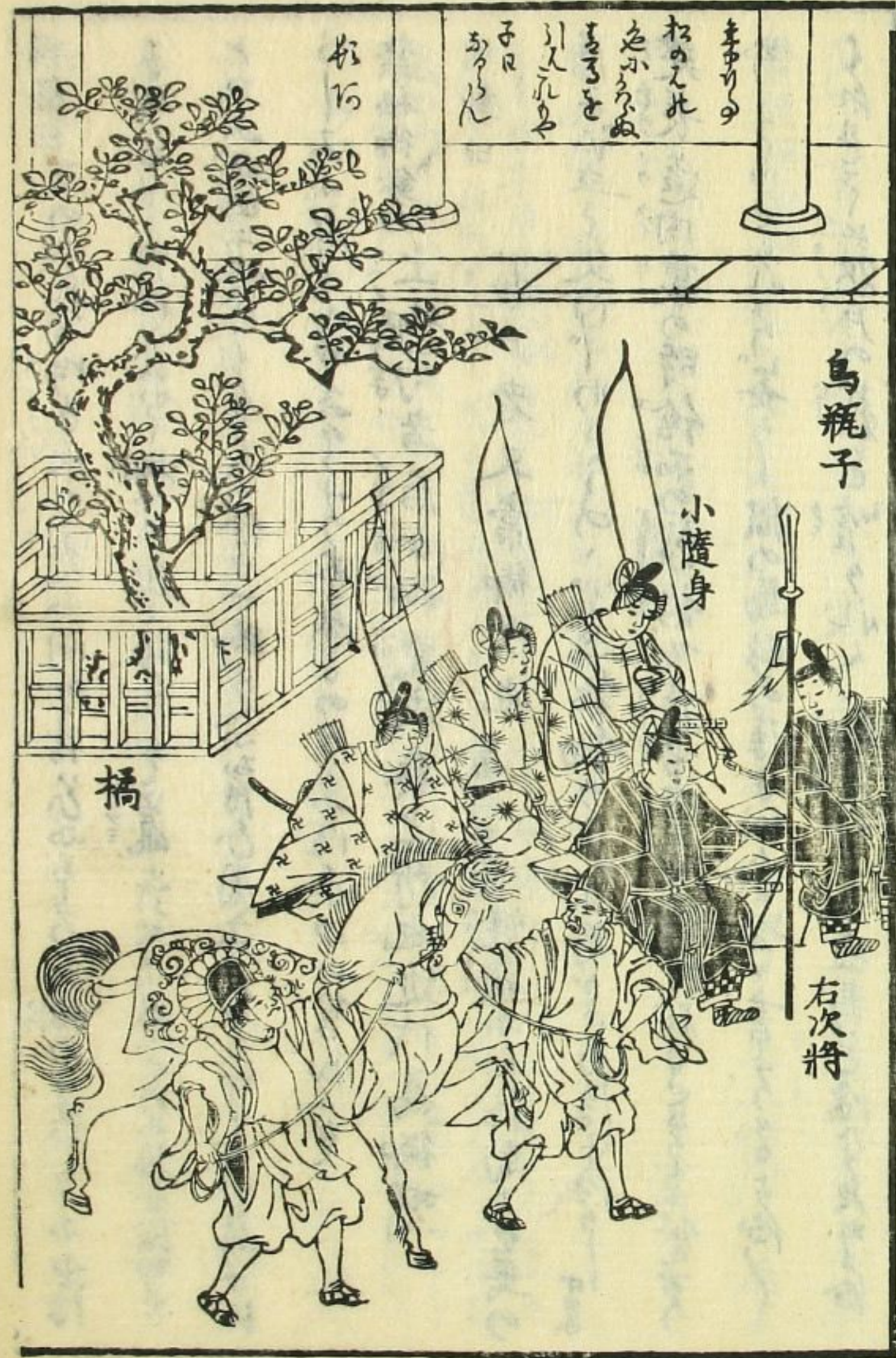
禁祕御録曰^{オミ}鬼間^ニ間格子也南間常不上有覆簾卷之其内

鬼^繪繪梯形者小障^{南北}行立御厨子置御膳具南壁白澤王切

子際交柱右之^禁祕御録曰^其臺ふんふふ之間あり^御手飯のとは一尺ふふめん二帖は

一々ふくはさう右障子のおとに法いへをふ。奥白那とふありたふ
たりハ法いへのそんふふぬらふ。元三ふとふとけりハを黄小上膳
は五面ハ儀也南二尺小何なるいへをふふふ一尺中ハ大ふん
つ御ふふふたいふんののらに法は御座をふ。又ハ火櫃あり。おとふ
提ぬくふ上の如く幸棧の次ハ法ふの法は一をふふ其次ハ法お
くそ障子あり万才あり法いへの間北に法は法あり一ニ尺障布
まふとあり。内ハ法いへを障子あり馬うてふふふ。幸の筆子ハ馬形の
障子ハ川。御餉のふふいぬる形の障子をふは法おとそ障子ハありて
木はふふふふふふふふふふ

後登^{たい}ふんの壺ハ書の上つふふふふふふふふふふ
何ふのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ



ちつて皆そぬえたるの傳ふよふと當ぬこれありむの門に神仙門と
しつち門の外に出納小舎人傳ふよふとこの前小倉とつちつ
よは藏人はんそんたあつすことかき。東はむさきも戸を各名門と
しつち。まろくの奉公卿のまはらひやかくせ門の外にてや。小いこつに
むひて下侍二百あり。東を書戸之次一間とておつちまろくをいふ
そはしもの所な其前にもい。むた時のおとさてたろ小倉のさう海ひら
は膳木のせんふそく。藏人頭小板敷も作も付よ人極膳書戸の内小
候次く八次の所に候。藏人よりおとさてたろておつちまろくをいふ。さうの
まろくをいふろく。夏はわく。下侍おつちまろくのたごまてておつちまろくをいふ。さう
おに日次の伝ふは。傳たつちがとて四府の鯉山一海河内和泉近江

日多まろくへの戸はと二間渡殿とつち中略上戸のまろく小倉中り斗半此
漆子成せし。夏は東とておつちまろくにふ月が足むとつちなる。夫木集曰
宗恒曰ういふ。虚んまろくを住むてまろくのたごまてておつちまろくをいふ。宇津保柱いそかきふ
平家物語曰ういふ。係りらのまろくに布衣の作
大槐秘鈔曰。殿上のお倉に夏はろくの木とつち木をらん入るとおつちま
ろく。ちつてまろくをいふ。まろくをいふ。おつちまろくをいふ。おつちまろくをいふ。
おんいふ。夏は燈ろく。城は木かきまろく
山槐記曰。應保元年十二月十七日勅使昇高遣戸取祿置打毬
禁曉秘鈔。さうの關はまろくをいふ。二間とて布衣とてまろくをいふ。お
多て漆子なり馬形おつちまろくのまろくに馬形の漆子とつちおつちまろくをいふ。

已上六合起于南行于北卯酉建之此内庭花舍。飛香舍。不載弘仁九年。高文後代所造加之云云於本集出

○桂芳坊 朔平門の内あり。又樂所と云
○華芳坊 桂芳坊の

○蘭林坊 玄輝門の北あり
○右掖門 安福殿の南あり。西壁垣門と云

○左掖門 春興殿の南あり。東壁垣門と云
○恭禮門 内衛門の北あり

○内衛門 陳座あり
○宣仁門 西向宜陽殿の西あり

○崇明門 草座の南面あり
○明義門 南殿の西面あり

○敷政門 東向宜陽殿の南あり。内衛門より下東の方
○無名門 右青瑣門の南あり。殿上の西面

○仙華門 南殿の北あり
○左青瑣門 宜陽殿の東あり

○神仙門 殿上の南あり。明義門より下西の方
○化德門 綾綺殿の北あり

○右青瑣門 神仙門の内あり

禁中殿舎異名

○南殿 紫宸殿 御後北庭の東庭

○中殿 信涼殿 常寧殿の南あり

○内侍所 温明殿 校書殿の東あり

○御匣殿 貞觀殿 南殿の東隅の外あり

○陣座 左近八月華門の内。右近八月華門の内

○兵衛陣 左ハ宣陽門。右ハ陰明門

○衛門陣 左ハ建春門。右ハ宜秋門

○縫殿陣 朔平門より北の陣と云

○鳥曹司 南殿の東隅の外あり

○白馬陣 春花門の南あり

八省院 朱雀門の内一町あり。南ハ冷泉。北ハ中御門。東ハ坊城。西ハ西坊城。名鳥餘惜不又へり。

八省院ハ天子臨期即位及諸司告朔所へ一名朝堂院又中臺と號く

皇居の午末の方へ。東ハ大政宮。西ハ豊樂院。北ハ中御院あり。中務省式部省。民部省。兵部省。刑部省。大藏省。宮内省。治部省等此官人集會の御殿あり。

○應心大門 三間閣 當院南面の正門へ。名義ハ易上象傳曰應乎天而時行也。又曰王之正門曰應門。鄭箋曰朝門曰應門。先詩大雅篇曰迺立應門。應門將將。謹又周禮匠人職ふは名義出たき。額ハ弘法大師書しゆ。本朝神仙傳。

曰大同二年十月大師を御ありて。淨土へ入る。歩子ありて。びねりか。せのひ

一かど。もろろへても御殿の空の如く。満作の形。不王右軍とてひり

子書のおうにたも。き久しくありて。岩小ふ。きと。又改めらる。み後

大河不書と。と。た。あ。の。事。ま。じ。の。ひ。ん。五。の。等。は。法。を。あ。ら。み。ぎ。の。あ。り。子。不。取。く。登。ふ。飛。け。き。も。あ。り。及。ま。浮。々。ふ。不。人。出。り。ひ。る。

もろろ一人五等和尚と賞と。七國小部こひき。帝都三門の額。公書うひや。板又應天門の額。公と。せ。ひ。ひ。の。上。の。ま。り。あ。る。點。と。高。小。ま。い。の。門。不。あ。る。後。見。り。は。ひ。子。驚。た。ま。ひ。め。り。あ。ら。上。た。ま。ひ。と。其。所。不。決。き。よ。れ。ん。人。手。と。と。ま。と。と。ま。の。あ。ら。り。傳。く。事。

○長樂門 應天門の東あり。一名左廂門と云ふ。○永嘉門 應天門の西あり。一名右廂門と云ふ。

○大極殿 朝堂院の正殿あり。又竈大殿と云ふ。北の方中央あり。額ハ敏行朝臣相小初。大極前殿を併後せしめ。あ。れ。を。明。堂。と。傳。ふ。と。云。明。堂。の。名。義。ハ。禮。記。不。出。り。昔。者。周。公。朝。諸。侯。于。明。堂。之。位。天。子。負。斧。依。南。鄉。立。

○小安殿 大極殿の後あり。○龍尾道 大極殿へ進む。石階あり。

○蒼龍樓 大極殿の東あり。龍尾道の東樓と云ふ。八間。○白虎樓 大極殿の西あり。龍尾道の西樓と云ふ。八間。

○栖鳳樓 應天門の外の東樓と云ふ。方四間。○翔鸞樓 同門の西樓と云ふ。方四間。

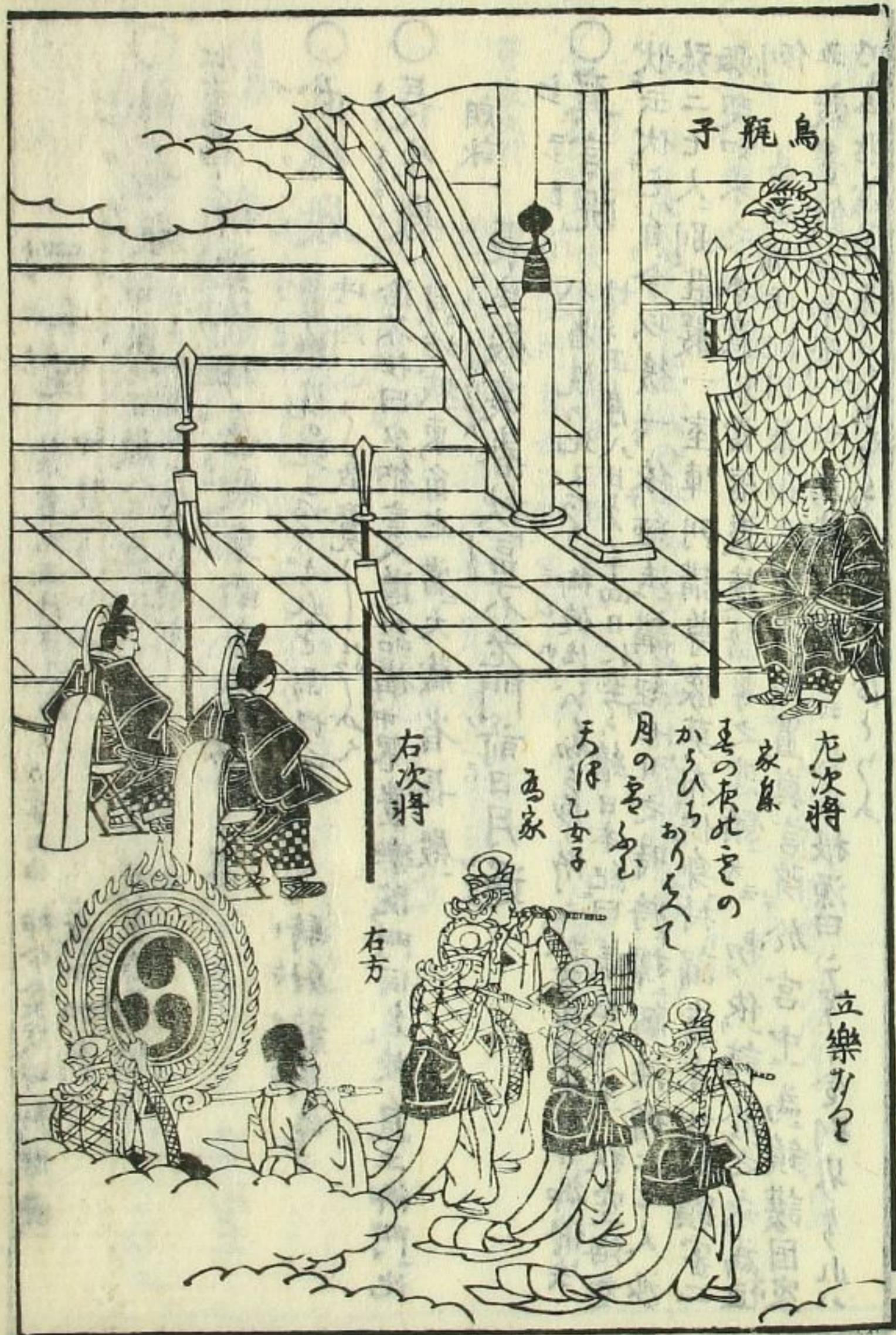
○含耀門	○會昌門	○興禮門	○章善門	○盛化門	○通陽門	○廣義門	○宜光門	○壽成門	○西華門
昭慶門の外北 東門とつゞ	應天門の内ふち 右内門とつゞ五間三戸	會昌門のふち 右廂門とつゞ	西南の外門とつゞ 五間三戸	宣政門の南ふち 東右廂門とつゞ	宣政門の北ふち 東左廂門とつゞ	白虎樓の北 ふち	蒼龍樓の北 ふち	光範門の北 ふち	大極殿の東ふち 覆通廊の西の門へ
○章義門	○章德門	○敬法門	○顯親門	○宣政門	○永陽門	○昭訓門	○光範門	○東福門	○昭慶門
興礼門の外 ふちとつゞ	會昌門の東ふち 左廂門とつゞ	章善門の南ふち 西左廂門とつゞ	章善門の北ふち 西右廂門とつゞ	東南の外門とつゞ 五間三戸	蒼龍樓のふち ふち	宣光門の南 ふち	白虎樓の北 ふち	大極殿の東ふち 覆通廊の東の門へ 北面の外門へ 五間三戸	

○嘉喜門	○永福門
昭慶門の東 ふち	昭慶門の西 ふち
拾芥抄曰 己上載弘仁勅文	
豐樂院	
八省院の ふち	
豐樂院ハ天子宴會所とて 拾芥抄馬場殿と書 中屋とて一も共ふ非ありん	
○豐樂殿	
當院の正殿あり 北の中央ふち	
○清暑堂	
豐樂殿の北ふちあり 大嘗會五什部 け所にて行せり所と松抄不出	
○顯陽堂	
豐永屋の東ふちあり 南前東堂とつゞ 十九間	
○承觀堂	
豐永屋の西ふちあり 南前西堂とつゞ 十九間名勝志永觀と書ハ誤ありん	
○觀德堂	
顯陽堂の南にあり 十九間 左内堂とつゞ	

○明儀堂 兼觀堂の南より右内堂より
 十九間
 ○延中央堂 儀鸞門の外にあり外東堂より
 九間
 ○招俊堂 門の外にあり外西堂より
 九間
 ○東花堂 清暑堂の東にあり
 ○西花堂 同 堂の西にあり
 ○栖霞樓 正殿の東北にあり
 二閣五間
 ○霽月景樓 正殿の西北にあり
 二閣五間
 ○豊樂門 南面の正門あり
 五間三戸
 ○禮成門 豊永門の東にあり
 左廂門より
 ○延明門 東面外の大門より
 三間
 ○崇賢門 豊永門の西にあり
 右廂門より

上十四

○陽祿門 延明門の北にあり
 北廂門より
 ○萬秋門 西面外の大門より
 本延秋門あり
 ○福禮門 豊永門の北にあり
 北廂門より
 ○儀鸞門 豊樂殿南面の中門より
 ○高陽門 儀鸞門の東にあり
 東廊より
 ○開明門 舍利門の南にあり
 東通門より
 ○青綺門 正殿の東にあり
 閣通門より
 ○逢春門 音修門の東にあり
 東廊の通路
 ○不老門 北面外大門より北方第一門許あり
 五間三戸
 ○舍利門 延明門の南にあり
 南廂門より於慈母舍利あり
 ○立德門 豊永門の北にあり
 南廂門より
 ○嘉樂門 儀鸞門の西にあり
 西廊より
 ○陽徳門 立德門の南にあり
 西通門より
 ○白綺門 正殿の西にあり
 閣通門より
 ○承秋門 白修門の西にあり
 西廊の通路
 木
 孝婦と老と魚とをいふ世々此の形なきこと
 院入道
 二王親王



烏瓶子

右次將

右方

立樂方

立樂方

鳥の衣此衣の
からひちありて
月の音ありて
天の音ありて
鳥の衣



正月十六日踏歌此
御節會ハ天武帝の
御時よりありて
聖武天皇の御時
かこぬるの
岷江入楚小
尺
寸

櫻

小隨身

左方

舞樂

正五五

手抄り
子早振神の泉此のつらや花をみよたのちめたり 宗時

○大學寮 二条坊門北。神泉苑西。南北二町東西一町の間に。 寺所ハ唐の國子監ニ准シテ也。
京都の御學問所也。遠近の諸生に宿業を食物新等ハ

天子より賜ふ寮の因ハ東西の二曹あり。東曹ハ菅丞相天神の御流也あり。西曹ハ大江維時の流也。職原鈔曰大學寮ハ四道儒士出身の處ニ

和漢最重職なり。紀傳明經明法算道を以テ四道と云。又當寮ハ先聖先師九哲安至一春秋二仲ヲ釋奠及東西の二曹ハ菅江の二家共曹主なり。諸氏

出身の儒道は二家ヲ訪ふ而已寮の頭ハ儒中の撰ニ當寮の司官ハ大學頭ト云唐名 助 推允大小 ○博士 一人 唐名大學博士 助教 二人 直講 二人 音博士 二人 國子監 書博士 二人 書學博士 ○明法博士 二人 律學博士 筆博士 二人 筆學博士 學生 四百人 音韻儒 書博士 書學博士

唐名 助 推允大小 ○博士 一人 唐名大學博士 助教 二人 直講 二人 音博士 二人 國子監 書博士 二人 書學博士 ○明法博士 二人 律學博士 筆博士 二人 筆學博士 學生 四百人 音韻儒 書博士 書學博士

文章生 十人 得業生 十人 學生 三千人 云 延喜式曰大學寮の博士に夏冬二時服を給ふ。云むらハ日本の國々に學問所あり。博士醫師各一人。其學生大國八十五人。上國四十人。中國三十人。下國二十人。之。醫生ハ五分の四小定々。醫生大國四十人。上國三十人。中國二十人。下國十六人。

大學寮寮に春秋二仲ヲ釋奠あり。毎年二月八日上丁日先聖先師以テ從テ九哲を祀ル。亦本朝釋奠の始ハ 文武天皇大寶元年二月丁巳日初より也。其後 光仁天皇寶龜三年の比。右大臣吉備公釋奠

の具儀然昔ニ依テ禮典器物等。嚴重ニ潤色シテ續日本紀ニ及テ。本朝釋奠の式ハ享日未明五刻。郊社令其屬及ハ。廟司以テ率テ。先聖先師神座と廟室の内中楹の間ニ設ク。先師顔子を首座トシ。天子塞焉より

本朝釋奠先聖先師九哲圖

冉有	仲弓	冉牛	閔子騫	先師	先聖	李路	宰我	子貢	子游	子夏
----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----

園韓神内裏并春の節又當己又ハ其日當ハ三牲免等ハ止らん。五寸以上の鯉鮒五十雙をとりしる。三牲其外魚魚等と六衛府よりしるを進じ。陳設の品々執事の負教何外延喜式不詳なり。

以下冉有七位傷四座也。又宣王の東不設西と上座也。又李路より己下子夏までの五座ハ文宣王北西設東上座後傷十一座何ハ南向ハ其牲ハ三牲也免あり三牲大鹿小鹿豚各加臘醢料也中華して三牲とハ牛羊豕あり本朝も反此替用ハハ。又二仲の丁日不

釋奠ハ禮記文王世子篇より凡始立學者必釋奠于先聖先師註曰周公

○大子寮の四趾ハ三糸のハ神泉苑町の西に加荒廢の後寛永年中ニ遷入んで大樹より酒井侯に賜て諸儀第あり或曰其儀も大子寮と銘と鑄する石手水鉢

○勸學院 方を町あり初手新ハ藤左右之子嗣公の館舎あり。

○瓶石字校より藤原氏公卿此字向所なり。同氏の内辨官の人を以て別當とす。

○辨學院 舊學院の北方一町也。此所ハ源氏公卿の學向所なり。在原行平卿上奏する以て遷置り。源氏長者公卿并別當なり。

○弘文院 舊高字長の北方一町也。此所ハ和氣氏の學向所なり。初ハ和氣清曆

上奏ふる川を造立りし所也

○淳和院 長安三條の西に旧趾ハ 初々天長上皇 淳和 離宮 宮のひて仙院に

まを西院と号す或曰橋太后宮 其後原氏の字向所より別當あり

○學子館院 長安三條の南に宮東 此所ハ橋氏の學子向所也初々 嵯峨

御后檀林皇后橋氏 其子秀才ハ備し 御舍 御舍の右に

氏公卿と相識し ひて此地を造立せり かの卿右大臣 當院此

別當 橋氏長者と稱す

○穀倉院 長安三條南朱雀西東西 畿内其外諸國の銅錢無王の位職

田及 没官田 太宰の稻等の諸庄物 細く所より 大同二年ハ

當院 依造より

○施藥院 洛陽九象坊の南西回院の東 少為院ハ藤原氏の初先上奏
ふる川 諸國此茶 此所ハ 保育 又ハ孤獨 此所

○悲田院 鴨川の西北 此所ハ 延喜式 曰京中路 此

○左京職 洛陽三象坊門南朱雀通 右京職 長安三條坊門南朱雀通

職員 令曰京師戸口の名籍 或ハ百姓 所部 義を貢舉 田宅 良賤の訥訟 市厘の度量 倉廩 租調 兵士の器仗 道橋の過所 闡遺 雜物僧尼の名籍 等の事 以

堂は職あり云云

○**鳩臚館** 朱雀の東七條坊門の南に東鳩臚館あり。原氏に海抄曰く、都北

より先玄蕃寮に置。弘仁以來東鳩臚館を空海に賜ひて東寺

より西鳩臚館に守敏に賜ひて西寺と改。其後七條の北朱雀の東西に西鳩

臚館と建立せしむ。云は所ハ異國より来朝の賓客に止在せしめて

卿食應の官署あり。まれば玄蕃寮と號し。司官は玄蕃頭と

號す。唐名ノウギハ中國及び新羅百濟高麗より来朝の旨趣は

天子へ奏する公廨あり。漢書曰く四方蠻夷は皆天子を大鳩臚とす。

劉熙曰く大鳩臚ハ陳へ大禮を以て賓客に居陳せんとす。一説

ハ鳩ハ多あり。臚ハ鳩の音とて聲の出は所の臚の上とゆふあり。

有らざれば臚とす。異國の通事あり。故に互に敵身と相傳ふ事ハ
鳩の臚より知るの通事あり。如くと喻を以て付する名也。

朗詠集

前途程遠馳思於鳳山之暮雲

後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚

○**羅城門** 平安城外郭南面の正門あり。朱雀通。通云九條大路。四條

我暇を經る山崎の関所あり。街道の端より西南に至る。俗に唐街道とす。

喉口。日本紀曰く天武天皇紀八年十一月難波都築羅城云。羅城とす。

名は我ハ三代實録拾芥鈔にも其説詳あり。羅城とは總曲輪の

後江相公

號^{トツカニ}通鑑曰唐懿宗紀不^{タウ}移^ク時克^ス羅城^ノ胡三省^ノ註^ト小羅城^ハ外^ノ大城^ニ
 又唐書^{タウ}高祖本紀^ニ曰築^キ京師^ニ羅郭^ヲ起^シ觀^ル九門^ニ云^フ朝鮮^ノ訓蒙^ノ字會^ニ曰
 稱^シ外郭^ヲ乎羅城^ト又羅城^ト之^レ九^ノ譯^ト也^ト外郭^ノ番兵^ハ以^テ羅^ノ卒^ト之^レ也^ト
 羅^ノ絡^ノ之^レ義^ハ如^ク之^レ也^ト諸^ノ說^ハ以^テ羅城^ノ記^ヲ歸^ス之^レ京^ノ城^ノ總^ノ郭^ト也^ト
 門^ノ之^レ小^{ナル}也^トあり

京^ノ之^レ名^ハ如^ク之^レ也^ト終

